

地域社会の変容と共同体の再構築

— 東京都御蔵島村を事例として —

小 島 孝 夫

はじめに

共同体とは、外部に対する閉鎖性と内部における平等性を基本原理とすることで生活のさまざまな面において共同性を創出させ、そのことにより個人の生活を規制する一方で、個人の生活を保障する社会関係あるいはその関係を前提とした集団のことである。

また、共同体は個人の生産力が幼弱で、安定した生活の維持を図るために共属意識で結ばれた集団が共同所有する土地や資源に依存せざるを得ない段階に対応した社会関係であるために、個人の生産力が向上して独立した私的再生産を営むことが可能となれば、次第に解体されるものであると捉えられている。

日本においては、惣有田や入会地を擁し、村法や村八分などの共同体規制によって維持されていた中近世の村落社会において農業生産を基盤とした共同体の原型が形成され、明治維新や第二次世界大戦後の農地改革や高度経済成長を経て、急速に解体されていくまでの間、日本社会の基層に残存することになった。

ところで、こうした共同体に対する意識は地縁や血縁を指標とした理解であって、生産活動が多様化した現代社会においては共同体の役割や存在自体を否定することにもつながる。しかし、共同体的なるものは現代社会においてもある価値観などの共属意識を共有して形成された集団としても成立しており、価値観が多様化した現代社会においては共同体的なるものは、当該社会を維持していくための役割が一層再評価されるべきものである⁽¹⁾。

小稿では、近年まで地縁・血縁に根ざした共同体としての生活文化を濃厚に残していた東京都御蔵島村を事例として、地域社会が多層的な共同体として変容を遂げていく過程とそれにともない共同体的なる意識がどのように再構築されつつあるのか検証してみたい。

1. 御蔵島村の生活の成り立ち

(1) 御蔵島村の概要

御蔵島は東京都心から南方約200km沖合いに位置する三宅島からさらに18km南方の太平洋上に位置する。東西5km・南北5.5kmのほぼ円形の島である。

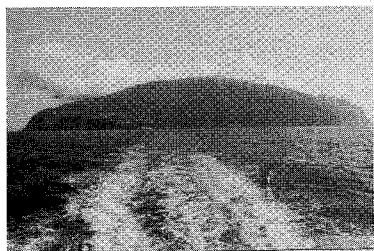


写真1 御蔵島全景

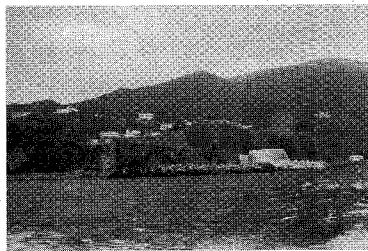


写真2 御蔵島の集落遠望

面積は20.55km²、島の周囲は16.4kmで、島の周囲は100から480mにおよぶ断崖に囲まれており、海上から眺めるとお椀を伏せたような形をしている。クマザサに覆われた島にはほぼ中心に位置する標高851mの御山に高峰が連なり、島全体が山島的な景観を形成している。御山は雲に覆われることが多く、御山に源を発して島の八方に流れ落ちる河川は水量が豊富で、水力発電に利用されたり、「御蔵の源水」として商品化もされている。

大正12年に一島で御蔵島村となり、島の南端の里地区に集落が形成されている⁽²⁾。平成18年1月1日現在の世帯数は145、人口は279人で内訳は男性144人・女性135人である。年齢別の人口構成をみると、年少人口44人、生産年齢人口190人、老年人口45人で、性別・年齢別人口構成をみると低年齢層よりも高年齢層の割合が大きくなる傾向がみられる。

急峻な地形の御蔵島では耕作地は発達しにくいうえに、沿岸域は水深が深い岩石海岸であるために防波堤を備えた港湾を建設することができなかったため、農作物の栽培も水産物の採捕も自給や島内での消

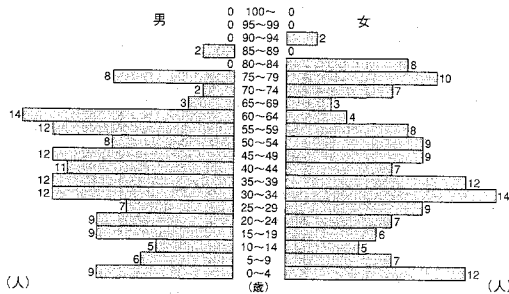


図1 御蔵島村の人口ピラミッド（平成16年8月1日 現在）

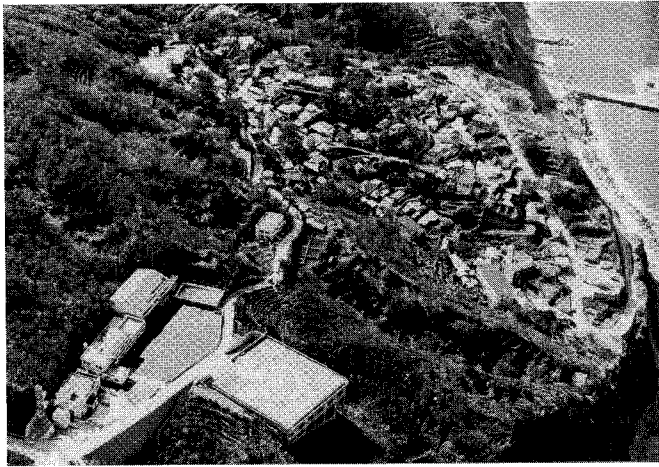


写真3 里集落全景

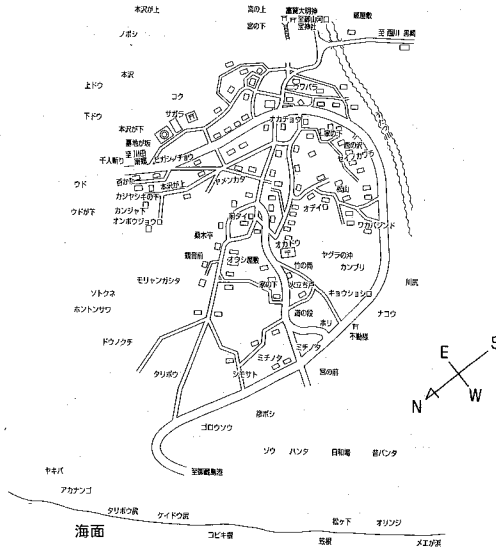


図2 里集落の地名

費を前提に行われてきた。御蔵島の伝統的な産業は、島の面積の大半を占める山林を生産の場とするものが多かった。なかでもツゲ材やクワ材の生産は近世期から近年にいたるまで盛んに行われてきた。近年はイルカウォッチングを目的とした観光客の急増により、急速に観光関連の業種が盛んになっている。

(2) 御蔵島村における生活文化

現在の島民の構成に注目すると、島内のみで生活してきた者、島で生まれ育ち島外での生活を経て島で暮らす者、他所から島に移り住んできた者に大別されるが、現在の御蔵島の生活文化が形成されてきた基層には、島の中で長年にわたり培われてきた伝統的な生活文化の蓄積があり、それらが現在に至るまでに島の内外の社会的・文化的影響の中で推移してきた。こうした視点で御蔵島の伝統的な生活文化を概観してみると、島の内的要素と外的要素とに分けて、次のような特徴を見出すことができる。

前者については、江戸時代から昭和12年頃まで続いた扶持米制度によって培われてきた協力を前提とした生活が、扶持米制度⁽³⁾の崩壊とその後の換金を前提とした家ごとの生業の展開とにより、それまでの競わない生活から競争を前提とした生活に取って代わられていったという大きな流れがあった。扶持米制度という島全体を包括する価値観は、廃仏毀釈後の神道に基づく儀礼を全戸で守っていく背景にもなってきた。また、扶持米制度の名残を知る世代は、それぞれの生業の選択に際して常に共倒れすることを懸念するような意識を強く有していたが、こうした世代は次第に世代交代し、扶持米制度の体験のない世

代が家長となり、さらに配偶者を島外から迎えることが多くなると、扶持米制度のなかで培われてきた協力を前提とした意識は希薄なものになりつつある。

後者については、離島という海によって隔絶された空間の中でツゲという資源を見出し、それらを利用することによって扶持米制度が維持されていたが、その原則が崩れるとそれまで換金の対象としていなかった島内のさまざまな事物や事象に目を向けていくことになった。そして、換金の対象となったものは概して島外や内地からの需要に則したもので、木炭、ニオイエビネランなどの需要に対して即物的に対応していくような生産活動が展開されてきた。こうした生産活動の流れの一方で、島の周辺に優良な漁場を有しているにもかかわらず、島の漁業は港湾の整備が整わなかったために主要な生産活動にはならなかった。そのことが島の周辺に生息していたイルカたちにとって良好な生息環境を維持することになり、島の周辺にイルカの群れが恒常的に生息するようになり、現在ではこのイルカたちが島の主たる観光資源になっている。

このイルカウォッチングに従事している人びとの多くは扶持米制度の経験も記憶もない世代が多くを占めており、島の中に新たな秩序を創り出そうとしている。

2. 御蔵島村における伝統的な資源利用

御蔵島は耕地に適した平坦な土地が限られていたため、主食となった麦・粟・稗・芋類の収穫量を合わせても、島民が年間に必要とする

食糧の半分にも満たなかったという。そして、それを補ったのが、自然界の多様な産物である。

(1) 植物の利用

御蔵島の森は水源地やカツオドリの繁殖地であるというだけではなく、イルカが餌とする小魚をはぐくむ汽水域を維持するためにも、欠くことのできない存在である。御蔵島の森は人びとに水と多様な植物とカツオドリとを恵んできた。その背景となったものは、御蔵島の森をカミヤマと捉える概念が共有されていたからである。森の奥山を聖域と捉えることで、トメヤマなどの慣行が集落全体で維持されることになった。

御蔵島では島内での資源の乱獲を防ぐことと資源分配の公平を図るため、シイの実採集やヘンゴ（シマテンナンショウ）採集、カツオドリ猟、イワノリ採取等にはクチアケという決まりがあり、それぞれの最適な採取日を判断して採捕活動の解禁日を定め、島民が一斉に作業を行った。

① 山林の利用と管理

御蔵島の山林は後述する28軒衆とその親族とによって拓かれたもので、私有林の管理はそれらの家が行ってきた。現在では、日常的に資源利用のために山林に入る機会が減少したことに加えて、管理者の高齢化により山林に入る機会自体が減少している。

かつては燃料にする薪となる樹木を伐採するマキヤマと呼ばれる山林があった。御蔵島では山林の境界木のことをアズキと呼ぶ。現在島内で巨樹として数えられている木々はほとんどが私有林の境界木とし

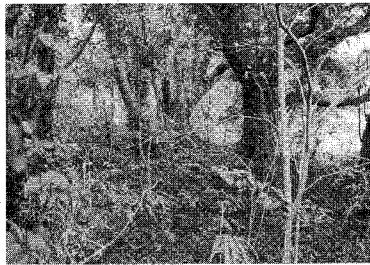


写真4 巨樹となった境木

てほぼ直線状に生えており、意識的に植えられ、残されてきた樹木であることがわかる。御蔵島の自然が実は人為的につくられ維持されてきたことが巨樹の存在からわかる。島内の道路整備が行われる以前には、それらがある山域まで入ることもできなかつたし、伐採しても出荷することもできなかつたため巨樹が数多く残つたのだという。

山林には自給用としてスギを植えた。また、「孫の代に伐れるかどうか」と言いながらツゲも植えた。村有地を開放して「林班」とし、南郷や黒崎高尾周辺で植林を進めた。林班で植林した山林は、80年間の期間を区切って利用されたが、ツゲの成長が遅かったり、十分な植林が行われなかつた場所は、昭和50年代に利用を開始するのをさらに30年間延長することになった。「八十年間山」や「十軒山」という山中の地名は、そうした植林に関わるものだという。南郷には28軒衆が拓いた山があり、それらを分配することで、移住した次三男の耕作場所とした。

村有林を管理するために役場には林務員という森林の管理を担当する者が配置された。日常的に山間地に住み山林の巡回を業務とし、倒

木の有無や下草の伸び具合などを調査し、併せてキクラゲやシイタケの採取などもした。

また、ツゲやハチジョウグワの伐採に際しては、伐りだす木の選択や運搬のための道づくりについての判断や指示も行った。山中の樹木の乱伐は、島の中の風向を変えたり、山中の土砂崩れを引き起こすことがあったため、大木の伐採についてはとくに慎重に行わなければならなかった。島外からのツゲやクワの需要が急減し始めた昭和40年代半ばに林務員制度は廃止された。

御蔵島で炭焼きを産業として育成することが試みられたのは寛政6年(1794)頃からだったというが、炭焼きが盛んになったのは明治時代以後で、とくに大正時代中頃から昭和時代初期にかけては全国的に木炭の増産が奨励され、御蔵島にも開墾のために島外から入植者が増えた。木炭の原料となったのはスダジイやタブノキで、古木を残すことを念頭に置いた山林の間伐作業を兼ねた作業となった。昭和30年代以後、内地でのプロパンガス等の普及に対応するように衰微し、次第に出荷も途絶えていった。炭焼きは男たちの仕事であった。

② ツゲ

ツゲの利用は28軒衆に限られていた。御蔵島に自生するツゲは江戸時代以後の島の暮らしを支えてきた重要な特産物であった。島からツゲが搬出されたのは、宝永3年(1706)頃といわれている。御蔵島の人びとにとってツゲはコメと同じような存在で、村の共同作業としてツゲの伐採と江戸への搬送を行い、その売却代金で食糧などの生活物資を購入し、それらを島内で分配することで島民の生活は維持されて

きたといわれている。ツゲは成長するのに大変長い時間がかかる樹種で、植栽してから伐採するまでに約百年かかるといわれており、そのために島民をあげてツゲの植栽に取り組み、ツゲをみだりに伐採することも禁じ、ツゲ山の資源保護に努めてきた。現在も産業センターなどでツゲの加工が行われているが、御蔵島に自生していたツゲの割合は減少してきているという。

御蔵島が三宅島の支配地となった貞享3年(1686)から三宅島から独立する享保14年(1729)までの43年間に御山の5合目以下のツゲは三宅島役人の判断によりほとんどが伐りつくされてしまったという。この時代は御蔵島の人びとに対してツゲやツゲの出荷作業に対する適切な代償がもたらされなくなり、十分な食糧や生活物資を確保できないという生活が強いられた。食糧の自給手段が限られていた島では、「百人超えたら油断するな」と人口増加を互いに戒めるという自衛手段を講じることで、この時期の暮らしを維持した。御蔵島のツゲ生産は第二次世界大戦後まで盛んに行われ、昭和30年代には島の年間収入の4分の1を占めていた。ツゲの古木には自然に特異な相が生じることがあり、それらはアカモクとかトラモクと呼ばれ珍重された。

ツゲの伐採は村中総出の作業で、これに従事した人たちには役場から日当が支給された。村中の15歳から60歳までの男女が従事した。45歳以上の男女は運搬のための山中の道作りを行い、伐採する木の量を山主が決め、20歳から45歳までの男たちは木の伐採作業の中心的役割を担った。20歳未満の男たちはその補助的な仕事をした。運搬を担当する女たちが背負いやすい長さに切りそろえる作業などをした。

役場でツゲを切ることが決まると、女たちは畑に出かける前に賃稼ぎの担ぎに行った。女性でも15貫（約40kg）を担ぐのが当たり前で、50～70kgほどの荷を担いだ時もあったという。山中から港まで運搬したツゲの総重量に応じて運賃が支給された。女たちにとって、70kgの米俵を担ぐことが、一人前としての一つの基準であった。山から里まで荷を担いで降りる途中で担いだまま休息できるように、道作りをするときに、枝をハの字の形に道沿いに打ち込んだウトと呼ぶ休憩場所を作っておいた。山の道を拓くのも女の仕事だった。

ツゲは植林してもこぶしほどの太さに育つまでには百年かかるといわれ、孫の代まで伐ることができないため、乱伐によって失われたツゲ資源の回復のために植林を積極的に進める一方、山中のツゲを計画的に伐採するために、村落と耕作地を除く島の総面積の7割を島の共有林とし、伐採に際して島民全員の総意で決定するような制約を加えていった。さらに、水源地であると同時に集落を風や潮から守る御山の森をカミヤマという聖域と位置づけることにより、一切の伐採を禁じた。明治時代以後は「部分林条約」が定められ、積極的に増殖が試みられるようになった。しかし、御蔵島のツゲが枯渇してしまったのは外来種の樹木を移植したからではないかと言われている。オオムラサキやシャリンバイも減少してきた。

③ その他の植物

クワ 御蔵島で養蚕のためにクワの植栽を新たに盛んに始めたのは、明治時代末期頃からだという。それ以前にはハチジョウグワという木が自生しており、木工品の材料として出荷されていた。明治時代から

天然のクワ材の出荷が盛んになり、昭和3年(1928)の昭和の御大典に際して昭和天皇への献上が行われたことが契機となって、村をあげての出荷が行われるようになった。

サクユリ 昭和15年頃まで短期間ではあったが、産業組合が中心となって、島に自生するサクユリの球根を出荷した。アメリカに向けて出荷するということで始まった。1軒で50貫も出荷したことがあった。

ニオイエビネラン 御蔵島の山にはニオイエビネランが数多く自生していた。昭和30年代から40年代にかけて、サクユリなどと一緒にニオイエビネランも採集され、出荷されていた。その後の内地でのエビネブームにより、島のニオイエビネランが一層注目されるようになり、出荷する以外に個人の山や役場の山からも盗掘されるようになった。

御蔵島ではエビネには毒があると言い伝えられており、それまで誰も触ろうとしなかった。ところが、ニオイエビネランは島外から来た者でも山中で匂いを頼りに探すことが可能だったため、急速に株が減少してしまったという。

ハコネコメツツジ ハコネコメツツジもまた盗掘が急速にすすんだ。

アシタバ 御蔵島では自生しているものを含めて、秋から冬を中心に通年にわたり食用して利用されている。春から夏にかけては灰汁が出て苦いという。一度開花してしまうとその株は枯れてしまうので、夏のうちに花が咲かないように芯を詰めておく。島内の広い範囲で栽培されているが、川口や南郷では草丈が1mを超えた柔らかいアシタバが収穫された。御蔵島ではアシタバを柔らかく茹でて味噌と和えたニンガミがよく食べられているという。御蔵島で胃がんの発症が少ない

いのはアシタバと椎茸を常食しているからではないかといわれている。

シイ（スタジイ）の実 1・2年の保存が可能のため、御蔵島では飢饉を凌ぐための食糧として重用されてきた。毎年10月にクチアケがあり一斉に収穫した。熟して地面に落ちたものよりも枝についているもののほうが柔らかいので、小枝ごとに採取した。実のつき方は年により異なり、豊作の年は1日に5升以上も採れた。

茹でてから乾燥させ、臼と杵で表皮を取り除き、さらに粉状にして米と一緒に煮て食べた。脂肪が多いため、体が温まるといわれた。

ヘンゴ 乾燥しておくとも長期の保存が利くため、飢饉を凌ぐための食糧として重用された。収穫の適期は4月から5月にかけてであったが、養蚕が盛んな時期には春蚕の種繭の出荷が終わる頃を目安にクチアケが行われた。主に自生しているのは南郷で、クチアケの日には村中の人たちが南郷に出かけた。ヘンゴからはクズと呼ばれた良質の澱粉がとれ、すいとん汁やクズ湯にして食べた。クズをとったカスはさらに乾燥して保存し、冬になると油で揚げて食べた。また、鍋で煮てそのまま臼に入れて杵で搗いたヘンゴ団子を作った。きな粉や砂糖をまぶして食べるため、子どもたちに喜ばれた。

ヘンゴには食用にするミナリヘンゴと食用には適さないノヘンゴとがあった。ミナリヘンゴの方もそのままでは灰汁が強いため、皮を剥き茎の付け根をくり抜き、水に晒して灰汁抜きをするようにした。

果実 シイノミヤヤマモモを採って食べたが、最近は採れなくなった。ダイダイのことをカブツという。

シイタケ栽培 戦後にシイタケ栽培が試みられた。

(2) 動物の利用

① カツオドリ

島でカツオドリと呼ばれるオオミズナギドリは、嘴と足ぐらいしか捨てる部位はない。肉は塩漬けに、ガラは塩辛に、油は食用油や灯火用油に、羽毛や翼は内地に出荷された。また、肉は三宅島の人びとから珍重され、米や餅との物々交換が行われた。御蔵島の人びとにとっては、重要な動物性蛋白源で、とくに第二次世界大戦後の食糧難に時代には、島民1人当たり1000羽くらいを消費したことになるという。昭和53年に2700羽を捕獲したのを最後に、食糧利用を前提とした捕獲活動は禁止され、島内の山林保全を前提とした駆除作業に切り替えられた。デドリと呼ばれる雛の巣立ち前に捕獲する。稲根神社に奉納されている江戸時代の労働図絵馬に描かれているように、御蔵島では伝統的に貴重な蛋白源として利用されてきたカツオドリの捕獲は、島民共有の資源として捕獲の日時や捕獲量について定め、違反する者を厳しく戒めてきた。カツオドリ特有のにおいがあり、密かに食しても島民にはわかってしまうのだという。夜間に、集落に落下してくるカツオドリの若鳥は子どもたちにとってはよいおもちゃだった。

第二次世界大戦後は、10月末から11月初めにかけて1日おきに計3日間、という条件で捕獲が行われた。1日に50羽から70羽ずつ捕獲した。捕獲時期に合わせて、林務員が山中の道こしらえを行った。

昭和50年頃まではトリミといって、クチアケの数日前に若鳥の成長具合を偵察する作業が行われた。巣の中の若鳥は一斉に巣立ちをしようことがあるため、クチアケの日程はトリミの結果により慎重に

決められた。若い人ほどカツオドリの巣穴探しに山中の奥のほうまで行く慣行があった。カツオドリの捕獲は主に島内の3ヶ所で行われており、年寄りには川田周辺を、若い者は御山や川口やシントリヤマで捕獲作業をすることが慣例だったので、トリミが終わると各自で山道の手入れなどをしてクチアケを待った。

戦前は3回まで口開けが行われた。捕獲者の名簿を作成し、捕獲頭数を定めるなどして一定量の捕獲が続けられた。現在は11月初旬に1日だけ、営巣による倒木や土砂崩れを防ぐことを目途とした一定数の駆除が行われている。この時期に捕獲するのは、6・7月頃に孵化した幼鳥がこの時期には巣穴の中で最も脂肪を蓄えた状態になっており、食糧としての利用価値が高い上に、脂肪を蓄えているためにまだ巣穴から出ることができない体形であるためにこの時期を選んで捕獲した。ツブキの花が咲くとカツオドリが飛び立つといわれており、親鳥は雛が巣立つ2週間ほど前に島を離れてしまうため、巣立ち前の捕獲は理に適ったものであった。また、巣立ちをした若鳥は夜間に島の周囲を飛びまわるが、なかには街灯や住宅の明かりめがけて落下してくるものがある。それらを捕らえて利用する家もあった。デドリ前の若鳥に比べれば肉質は落ちるというが、山に捕りに行くことができない老人たちにはカツオドリを得るよい機会となった。カツオドリの捕獲は、御蔵島の人びとにとっては、食糧を自給するための手段であると同時に、捕獲から消費にいたるまでの一貫した生活文化でもあった。

カツオドリの捕獲は厳格な口開け制度により実施されていた。車がない時代には、夜半に第1回目の合図のサイレンが鳴ると島民たちは

カツオドリを捕獲するための罾などを背負い籠に入れて、村はずれの集合場所に集まった。2回目のサイレンの合図で、各々が自分の山に入り、夜が明けるのを待って捕獲作業を開始する。カツオドリはシイの木の前根元に巣穴を掘っており、各々がそれらの穴の中から選んだ自分だけの捕獲場所を持っており、それらの巣穴を順次巡っていき、巣穴から雛を引き出す。人があまり入らない山域のカツオドリは、巣穴をあまり深く掘らないので、そうした巣穴を探していった。巣穴から巣立つ前の雛鳥は脂身がまだ残っているが、巣穴から出た若鳥は脂身が落ちてしまっており、風味が落ちるといふ。

巣穴の深さは通常一尋以上あるため、巣穴の入り口を掘り崩したりする場合もある。ただし、カツオドリの親鳥は毎年同じ巣穴で営巣するため、巣穴を取り崩すようなことはしない。巣穴の形状によっては、巣穴の奥まで雛をかき出す金具や腕が入るだけの穴を途中から掘りぬき、そこから雛をつかみ出す。捕獲作業を終えた巣穴は元通りの形状に戻し、次年度も猟ができるようにしておく。同じ親鳥が営巣を続ける限り同じ巣穴を利用して捕獲作業をおこなうことになる。雛はその場で首の関節を外して絶命させ、胃や腸の内容物を抜き出してしまふ。

昭和30年代前半頃の猟の様子は、午前2時に起きて御山に登り、それぞれの向かう場所へ沢沿いに下りた。当時は日が昇る頃には捕獲作業を終えて、捕れても捕れなくても午前7時から8時にかけて里に戻り、その日のうちに自宅でヨツと呼ぶハネ（肩肉）とアシ（腿肉）などに分けて、保存食とするための処理を済ませたといふ。車を使うようになってからの日程は、午前5時頃に家を出て、午前6時頃から捕

獲作業を開始し昼を目安に山中での捕獲作業を終え、自宅に戻って処理を済ませてしまうという。

カツオドリの捕獲は捕獲作業そのものの苦勞に加えて、山中での汚物処理、自宅に帰ってからの肉処理作業も大変な作業であるため、近年は捕獲作業に参加するのは10人ほどだという。

「カツオドリは捨てる場所がない」といわれるほど、御蔵島ではカツオドリを利用し尽した。かつては羽毛の需要が高かったので、胸の羽毛も丁寧にむしりとった。そのために、山中では雛の捕獲のみ行い、自宅に戻ってすべての処理をした。現在は羽毛の需要がないため、山中で胸の羽毛をむしりとってきてしまう。

里に戻ると、両羽・両足を打ち落とし、胴体に残っている羽毛を抜きとる。さらに、煮立った湯に首を持ってくぐらせ、細かな羽毛を残らずとる。次いで、冷水に漬けて冷ました後で、しばらく陰干しをする。この作業をすることにより、捌いた際の血抜きが容易になる。

下処理のための捌き方は次の手順で行う。頭とシリと呼ぶ肛門周辺を切り落とし、背中から包丁を入れ皮と身とを分ける。身から肋骨とドリと呼ぶ肺を外す。「トリを食べてもドリは食うな」という。下処理が終わると、ヨツと呼ぶ肩と腿の小肉塊を外し、肉が残った肉を包むように皮をたたんで塩蔵する。ヨツは冷凍しておき、適宜に食用とする。肋骨と背骨はミンチにかけてトンガラ（鳥がら）や塩辛に加工した。塩辛にする場合は、11～12羽に対して1合の塩を加えた。心臓とレバーは煮つけか酢味噌であえて食べた。

油は食用油として利用する以外に、灯火用油として用いたり、山仕



写真5 カツオドリを冷水に漬ける

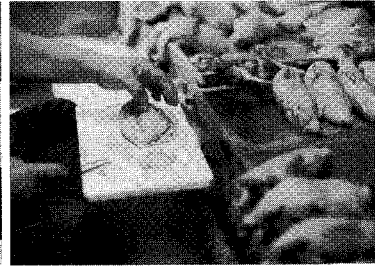


写真6 カツオドリを剥く

事で木材の運搬に用いる木馬の櫓部分に潤滑油として塗ったり、船作業に従事する若者たちが体に塗ったりと、多様な利用法があった。醤油甕に保存して利用した。豚を飼育していた時代には、頭やドリは餌として利用した。三宅島の人たちはカツオドリを食べたがって、御蔵島の人たちともち米と交換することがあった。

塩漬けされた肉は日常的に雑炊、煮付け、手羽の酢味噌などにした。

アメリカという屋号の家が島にカレーの調理法を伝えると、稲根神社の祭礼のご馳走として、カツオドリカレーが食べられるようになった。カツオドリのカレーは遠足や子どもの祝いのときにも作った。カツオドリの雑炊は塩漬けした肉でなければよいだしがでない。塩加減でコクが出るといわれている。麦飯に大根を加え、味噌でにおい消しを兼ねて味の調整をする。煮付けはショウガやゴボウやタマネギなどにおい消しのなる野菜と一緒に煮ることが多かったが、ショウガと一緒に煮るのが御蔵島では一般的だという。また、サトイモと大根と一緒に煮たものもおいしい。体が温まって汗が出るので、冬によく食べた。肉をすりおろして塩辛を作った。調味料としておつゆのだしに

もした。カツオドリの肉を長期に保存していると、油が酸化してしまい赤くなってしまい風味が落ちる。このことを肉がサビルといい、秋の捕獲前まで保存する肉の風味を保つため、夏前に油抜きをした。

② 養蚕

明治時代末期から昭和16年頃にかけて盛んに行われた。豊富なクワを利用した養蚕はツゲの生産を上回るようになり、戦前までは一番の現金収入源であった。「蚕の稼ぎで1年分の買い物した」という。春蚕の時期には学校は養蚕休暇となった。特別に生産量の多い家をトクノウカと呼んだ。

養蚕の技術は、明治期に群馬県安中市や藤岡市で学んだもので、御蔵島でかつて食べられていた「ホウロク焼き」というお菓子の製法もこの過程で御蔵島にもたらされたといわれている。生産者は片倉製糸と契約を結んでおり、種繭と糸とを出荷していた。春蚕は4月から蚕を飼い、繭になるまで各家で蚕を育て、繭になると西の沢にあった施設に集荷し、内地に出荷した。種繭の選別には東京から十人ほど選別担当者が来た。餌にするクワは主に段々畑のフチロやウルシロと呼ばれた畔に植えて、土抱えを兼ねた。

キョウソ（蠶蛆）というカイコノウジバエの幼虫が島では発症しなかったもので、種繭の需要が多かった。春蚕が終わると、自家用に夏蚕を飼った。秋蚕を飼う家もあったが、いずれも自家用に用いた。

③ 家畜類

キジ・コジュケイ 戦前に山にキジやコジュケイを放鳥したことがあったが、島ではキジもコジュケイも食用にはしなかった。キジが畑

を荒らして困ったことがあったが、今はどちらも姿を見なくなった。

酪農 里の集落の上のほうに、牧場の跡地がある。戦後に数等の牛の飼育が行われ、昭和30年代までは学校給食用の牛乳生産のためにホルスタインも飼育されていた。南郷では、牛や豚を内地出荷用に飼育していたこともあった。子牛や子豚を船で出荷した。

養豚 ほぼ全戸で豚が飼育された時期があった。島内での消費と出荷のための飼育であった。豚の飼育には肥料を自給する目的もあり、豚舎で豚が踏みつけたハチジョウマグサと人糞を混ぜたものを肥料として畑にまいた。東京への出荷は豚を箱詰めにして船に乗せるため、自宅で箱詰めにし、玉石の坂を櫓のようにして滑らせながら、港まで下ろした。

④ 魚介類と漁法

漁業 御蔵島における漁業の特徴は、漁撈活動自体が小規模で不定期なものであったため、元来が島内での自給を念頭に置いたもので、島外に出荷して現金収入を得るというものではなかった。このことは現在でも同様で、夏季に大量にタカベが漁獲された場合でもまず島内での受容が最優先され、家庭には2kg、民宿などには5kgといった基準を決めて販売されている。

御蔵島周辺に回遊してくる魚はムロアジ・カツオ・トビウオなどで、根付きの魚にはタカベ・シマアジ・カンパチ・ヒラマサなどである。

フナモト（船元）とフナコ（船子）の関係は姻戚関係によって構成されていたが、その関係を拘束するような慣行は見られず、各家の長男を中心とした血縁による定常的な漁撈集団が世襲的に維持されてき

た。御蔵島には水田がないため農耕における組織的な共同作業というものも希薄である。それに対して、小規模であっても漁撈活動においては共同作業の慣行が存続しており、複数の家を統合する機能を有していた。しかし、組合が自然消滅し、樹脂製の漁船が普及する過程で、漁撈活動も家族を単位にした労働形態に推移していくことになった。

出漁できるのは年間の3分の1程度しかなく、出荷手段が船舶に限られていて出荷機会が不安定であるため、漁獲物は主に島内消費となり、漁業を専業とすることは困難であった。そのために大規模な資本を投下するような漁法の展開はみられず、個人単位の漁法が主体となっている。御蔵島の漁はワカレニシと呼ばれる冬季から春季の境に吹く強風が止んで海面が風いでくる4月頃から始まった。4月にはカツオの一本釣りが始まり、4～9月までの期間はトビウオの棒受網漁も行われた。4月には大振りなハルトビ漁が行われ、6～9月にかけては小振りなナツトビ漁が行われた。5～10月下旬にかけては断続的にテングサ採取が行われた。5月頃からタカベ漁やトウゴ漁も始まった。梅雨が明ける7～9月にかけて、イセエビの刺し網漁、ムロアジの棒受網漁、マグロ釣り漁、イカ釣り漁、コナガリ（トコブシ）採取が盛んに行われた。イルカは漁師にとっては魚網を破ったりすることから邪魔な存在だったが、イルカを食べる習慣が島民にはなかったため、突きん棒漁の対象にすることもなかった。

漁船 大正時代末から昭和時代初期頃まで御蔵島には主にタカベの敷き網漁に用いた艀漕ぎの漁船が4～5艘あったという。それぞれの船はフナモトのもので、各船には主にフナモトの姻戚関係者によって

構成された定常的なフナコが組織されていた。昭和6年頃から艀漕ぎの漁船が発動機を搭載するようになると、フナモト・フナコ制度は次のように改められた。発動機の搭載や新船建造に際してフナモトが全額を負担するのではなく、旧制度の構成員であるフナコたちが組合員としてこれらの費用を分担して負担することで、新たな株組織を形成していくことになった。その実態は旧フナモト・フナコ組織が組合組織に改編されただけのことで、各家の長男は世襲的に組合員として漁業に従事していくことになった。南郷に居住していた次男以下はほとんど漁業に従事することはなかった。

昭和3～5年頃にかけて島には4艘の漁船があり、昭和10年頃までに動力機関が焼玉エンジンから発動機に変わった。村などからの補助金を活用しながら、漁船の改良がすすめられた。

昭和10年頃にこれらの漁船が老朽化したため、三宅島で新船を建造したという。次いで昭和30年頃には老朽化がすすんだため、再度新船を建造した。このときには三宅島の稲取から船大工を呼んで、島内で建造した。昭和30年代後半になると若者たちの島外流出が激しくなり、漁撈活動自体が衰退し昭和42年頃に組合自体も自然消滅したという。

漁船はカグラサンで引き揚げた。当時は港の整備がすすんでいなかったため、カグラサンによる漁船の引き揚げ自体が大変な作業であった。その後、カグラサンは発動機を利用したウィンチに変わった。

昭和30年頃まで島にも船大工がおり、主に舳を造っていた。家大工も兼ねていた。

漁法 御蔵島では昭和20～30年代にかけてムロアジを主対象とした

棒受網が4カ統程稼動していた。この漁法は昭和初期に新島出身の前田文之助のよって導入されたもので、3～5トン級の漁船で操業した。夕方に水揚げしたムロアジをなまり節程度に加工して仕上げて出荷した。冷凍冷蔵保存方法が十分にできなかった時代においては、大量に漁獲した魚類を有効に換金する方法であった。仲間や親戚で出資して経営した。仲間や親戚で出資してトビの流し網経営したこともあった。

タカベの敷き網漁は島民の共同漁業として操業された。タカベは現在でも大量に漁獲できるが、海が時化していると内地に出荷することもできず、冷凍保存して島内で消費するしかないという。現在は刺し網漁で漁獲する。夕刻前に網を仕掛け、翌朝引き揚げる。出荷の目安は、一樽（約30キロ）以上の漁獲があると東京へ出荷した。一樽に満たない場合は、島内で販売したり、皆で分けたりした。タカベ漁は一網100万円程の漁獲があり、年間で2000万円程の漁獲高になる。かつては旋し網漁でも漁獲していた。

5月頃からイセエビの刺し網漁も行われる。イセエビは出荷用で、魚類は自家消費となる。サンノジ（ニザダイ）などは投棄される。

三宅島を拠点として、7トン級の漁船で通年にわたりマグロやカツオを追っている人もいるという。カツオの一本釣り漁は村で漁船を造って操業した。

冬にササヨ（イスズメ・モサリ）釣った。浮きは40～50cmで、浮き下の仕掛けの釣糸は絹糸で、長さは20尋に仕立てた。タカベを釣り、それを餌にしてカンパチを釣る。カサゴはオヨギ釣りという漁法でとつた。

冬場にはイワノリ・ハバノリ採取が行われた。イワノリ採取はよい稼ぎになったという。一冬で数10万円の稼ぎになったこともあったという。

3. 離島生活を支えてきた論理

(1) 28軒衆

御蔵島は長い間1島1集落で、戸数は28軒で人口は100人前後という状態が続いていた。この28軒は現在も「28軒衆」と呼ばれている。内訳は栗本（10軒）、広瀬（9軒）、徳山（6軒）、西川（2軒）、小林（もと徳山姓、1軒）で、同姓間での本分家関係はなく、各家は平等の立場であったという。

長い間限られた家数の中で婚姻が繰り返されたため、各家の間には何がしかの婚姻関係があり、各家の関係は親密で、28軒はみな親戚のようなものだという。かつては「西の人」「東の人」という呼びわけをしていたが、皆が婚姻を介して親戚になってしまっただけからは、そうした呼び分けもしなくなった。冠婚葬祭に際しては、どこの家の場合でも、みな仕事を手を休んで参加することが慣習となっていた。かつては島で1軒でも不幸があると、その年は全戸が喪に服するため、すべての神事が取りやめになったこともあった。元々の人たちという意で、自分たちをジネンジョと呼ぶこともある。

28軒衆と呼ばれる家には、祖霊であるトシャマが祀られているという。28軒衆以外の家にはジヌシガミ・ジヌシサマが祀られており、両者は次のように区別されていた。ジヌシガミは屋敷地の隅に祀られる

その土地についた神で、屋敷地の空間を守護すると考えられている。家の鬼門にあたる位置に小さな丸石を立てて祀っている。それに対してトシャマを祀る家は新たにジヌシガミを祀る施設を持つことをせず、トシャマがジヌシガミをも兼ねると考えられている。トシャマは玉石を祀ったり石祠を建てたりしているが、ジヌシガミのように鬼門に祀るといった規則性はないようで、家の横や裏などに祀られている。

表 1 二十八軒衆の家印と屋号

家 印	屋 号	家 印	屋 号
士	藏 人	キ	弥右衛門
士	四郎右衛門	仁	甚右衛門
七	喜 三 郎	因	甚 次 郎
今	平左衛門 太郎左衛門	令	五郎左衛門
㊦	七四郎 左衛門	△	長右衛門 松
イ	惣徳市弥 右衛門	十	清右衛門
へ	傳清仲久 右衛門	㊦	弥惣兵衛 平
又	傳清仲久 右衛門	企	市郎左衛門 六郎左衛門
△	伝清武四郎 右衛門	二三	助左衛門 三郎左衛門
○	伝清武四郎 右衛門	二三	久左衛門
企	大藤彦作 右衛門	△	與右衛門
丁	大藤彦作 右衛門	木	治市平郎 次郎
田	大藤彦作 右衛門	□	吉左衛門
十	万右衛門	井	万 藏 寺

(2) インキョ・サンキョ

御蔵島では長男が結婚すると、両親は同じ屋敷内にあるインキョと呼ばれる家屋に、長男以外の子どもたちを連れて分住隠居をした。このことで両親は本家の家産や家督を長男夫婦に譲ることになる。長男は家長として本家（オオヤ）を継承し、家計も本家とインキョとで分割して営むことになる。さらに長男夫婦の長男が結婚するとその長男夫婦に家を明け渡すということが繰り返され、長寿の家庭であれば、同じ敷地内に三世代が分住することにもなった。この場合は、祖父母の家をさらにサンキョと呼び分けた。

別居していても家族としての絆は強く、家の労働は全員で行うことが原則であったし、インキョの暮らしぶりについては長男の妻が何くれとなく面倒を見た。インキョの水汲みは長男の妻が必ず行った。祭

礼などのモンピにはハレの食事を長男の妻が作りインキョに届けた。世代間の調整のためには隠居制度はうまく機能してきたと評価されている。

一方、インキョに移り住んだ次男以下の子どもたちは、他家の婿養子になるか嫁に行くしか結婚する方法がなく、機会に恵まれなければ一生インキョで過ごすことになった。

御蔵島において、現在でも親族として強く意識されているのは、インキョ、サンキョ、娘が嫁いだ家である。墓所に参る祭にもこれらの家の墓を順番に回っていくという。

親子に次いで緊密なのが、シンルイと呼ぶ親戚の関係である。全戸が婚姻によって姻戚関係となっており、かつては全戸がシンルイであった。シンルイの中でも家を別にして兄弟姉妹や叔・伯父母、さらに嫁の実家をヤウチと呼び、相互をヤウチナカマとしてシンルイ以上に濃い親戚つきあいをした。

分住別居しているオオエ・インキョ・サンキョの親子が共通に祀る屋敷神のことをジヌシガミまたはジヌシサマと呼ぶ。その祠の周囲にはクスヤツゲなどの樹種を植え込んでおり聖域を思わせるような空間になっている。年神やトシャマなどの名称を併せ持つものがみられ、複数の祭神を併祀する傾向がみられる。

オオヤ・インキョ・サンキョは島内の伝統的な分住別居制度の呼称であると同時に、それぞれが住む家屋の呼称としても用いられている。母屋のことをオオヤとかオオエと呼ぶ。それぞれに付属する物置はナヤと呼ぶ。島の典型的な間取りは4間で、玄関に近い部屋がナカノマ、

ナカノマの横の南に面した部屋はザシキ、ナカノマの奥の囲炉裏を敷設し、神棚やシラノタナやエビスなどの諸神を祀る棚がある部屋はイロリノマ、一番奥の納戸を兼ねた部屋はチョウデエと呼ばれた。ナカノマとイロリノマの西側は土間でそこが玄関となった。

里集落から卯辰川を過ぎると、クラヤシキと呼ばれるほぼ同規模の平屋の板倉群が残っている。日用品や季節ごとの衣類、機具やかさばる道具類などが保管されている。現在は倉として利用している家はわずかになったが、かつては階段状に林立していたのだという。家ごとに建てられていたというが、限られた空間を活用するために、倉の内部を本家とインキョとで分割して共用するなどということも行われた。

冬季の間、気候の穏やかな南郷で避寒生活を送る習慣があった当時、避寒の時期を過ぎて里に戻ると、里の集落が火事で全焼していたという事件が端緒となり生まれた慣習であるという。万が一の火事や災害を考慮して、板倉を集落から離れた場所に設置することと併せて、住宅内の空間を広く活用する工夫でもあった。

(3) 畑

島の畑は28軒衆が世襲で管理してきたもので、山林を一斉に開いて畑を造成したこともあった。ある家で畑を開くと、畑を作りたい人はそこの一定区画を借りて耕作した。借賃は手間で返した。畑作では台風が一番怖い。台風が来れば斜面の畑は土が流れてしまうし、野菜は風雨でたいてい全滅してしまう。とくに6月台風は「種失いの台風」と呼ばれる。島の土地は村有地と私有地に大別され、現在では私有地の所有者の約半分は島外に住んでいる。南郷は温暖で、風や台風の影

響も少なかったため、食料となる野菜類を大量に安定した状態で栽培することができた。サトイモ、ダイコン、ショウガ、シイタケ、アシタバ、センブリなどが栽培された。南郷ではツゲもよく育ったという。

畑作りは女たちと年寄りの仕事とされていた。畑に行くのと隣接する畑の草取りもする。現在畑作りをしている人たちの高齢化がすすむと、次第に遠方の畑は放棄されることになるのではないかと危惧されている。

御蔵島の畑の多くは切替え畑で、ハタケとかダンダンバタケと呼ばれている。切替え畑に対して常畑はナバタケと呼ばれる。春の種蒔き時期の前に斜面を順次拓いていった。畑地の周囲には、八丈島から移植されたといわれているハチジョウガヤが植えられている。畑の作物の風除けと畑の土抱えを兼ねており、繁茂すると牛の餌として利用したり、豚小屋に敷き詰めて堆肥として利用した。

かつては1年目にはアワ、2年目に麦、3年目にサツマイモを作り3年程耕作したところで、ハンノキ（オオバヤシャブシ）を植えるというのが一般的だったが、その後は、ほぼ2年間は主にサトイモを栽培し、3年程したところでハンノキ（オオバヤシャブシ）を植え、その後にアシタバの種を蒔くという耕作法が一般的になった。サトイモ以外にも、家によってはサツマイモ、ジャガイモ、二条麦、六畳麦などを栽培した。アシタバはよく育つが、ハンノキが繁茂しアシタバに直射日光があたらなくなると、自然に枯れていった。3・4年周期でかつて放棄した山林を順次拓いていくことによって、一定規模の耕作地を維持していった。切替え畑の一枚の規模は広くて5畝程度だった。

かつては1軒の家で5枚くらいずつ耕作していたという。切替え畑に植えたハンノキは、植えて13年から15年過ぎると伐採し、薪や炭にして利用した。伐採した後に5月末頃に火入れをして畑として利用した。ハンノキの根は抜けるものは抜き、抜けないものはそのまま放置しておいた。また、ハンノキを使って、山道にオタと呼ぶ足がかりを作った。ウト（杭）を打ち込み、そこにオタを固定していった。ハンノキは根に根粒菌を有しており、根粒菌が大気中の窒素ガスを植物が養分として利用できる形に変える、窒素固定作用をすすめるので土壌改良の役目を果たした。伐採後3年ほどすると土壌改良効果が減少してくるので、新たなハンノキを植えるようにした。

畑の畔にカヤ（ハチジョウススキ）植えた。

御蔵島では畑は個人の所有という意識が強く、「誰々の畑」というように捉えられていた。嫁ぐ際に実家の畑を分けてもらうという慣行があったが、母の畑を娘に譲ることが世襲的に行われてきた。その際には口頭で、「ここをやる」というだけの譲渡法が多かった。実家の畑が少ない場合は借りて耕作するようにした。所有権はそのまま貸し借りしている畑をオチャノミバタケという。

御蔵島では畑をシロとも呼び、古い畑をフルシロ、新しい畑をアラシロと呼び分けた。

老夫婦がインキョすると、畑もインキョ用とオオエ用とに分割して耕作するようにし、それぞれをインキョバタケ・オオエバタケと呼んだ。嫁が婚家を出される時に婚家からの慰謝料のような形で譲られた畑をイトマバタケと呼んだ。

家屋の近隣の畑の一角を一段か二段にわたって野菜の苗場とする。ナエバに隠居屋を建てることもあった。また、里集落のまわりの畑をナエマガワリと呼んだ。

(4) 扶持米制度と共同作業

御蔵島をはじめとした伊豆諸島では、耕作地に適した土地が限られていたため常に食糧の確保に腐心しなければならなかった。そのために伊豆諸島の場合は作物による年貢納入は困難で、御蔵島の場合は絹を年貢として納めていたという。その後に内地でも絹生産が盛になると、御蔵島の絹年貢は金納制に変えられていったようであるが、金の代わりに換金できる特産物を年貢として納めることが慣行となり、御蔵島の特産物として江戸に出荷されていたツゲ材を年貢として江戸に運ぶようになった。

その当時、御蔵島ではツゲ材を江戸に出荷し、島内で自給できない米などの食糧や生活必需品を購入していた。島内では貨幣はあまり流通していなかったようで、それらの江戸からの荷物は全島民の人数割で分配されたという。この慣行は近代まで続き、全島民で分かち合うことは暗黙の村是のようなものであった。現在の老年層の島民の中にはこうした意識を強く持ち続けている者がおり、それらの世代より若い世代においても、舂作業を体験した世代などには個人は島民全員の奉仕者であると考えてきた人たちが存在する。

一
二
五 現在の島民の構成は、島内のみで生活してきた者、島で生まれ育ち島外での生活を経て島で暮らす者、他所から島に移り住んできた者に大別され、それぞれの集団に属す人びとはそれぞれが経験してきたこ

とを判断や価値観の基準としており、それらが重層的に並存する形で現在の御蔵島の生活文化が形成されていると考えられる。そしてその基層には近世期から島の中で長年にわたり培われてきた伝統的な扶持米制度に根ざした生活文化の蓄積があり、それらが現在に至るまでの間の島内での社会的・文化的基盤となってきたのである。

村内で行われていた共同作業などもこうしたことが基盤となっている。新築や改築の際には村中の奉仕作業として、木の伐りだしから木挽き作業までをした。現在でも家屋に関することは村中の作業となる。村中が総出でやる仕事をムラブシンといった。砂利を撒いて道路の轍を直したりするミチブシンやハマブシン・トイブシンもムラブシンとして行われた。かつてはムラブシン以外にも、ヤマダシ、フナイタカツギのような臨時の共同作業も行われた。また、村をあげてのムラブシンではないが、個人宅のジギョウツキやムネアゲ、ヤウツリなどの作業などは、親戚が集まるとほとんど全村民が揃うことにもなった。

里集落内の共同井戸は上町・中町・下町にある。井戸の位置により町名の区分がされているのではないかという。ただし、井戸の利用についての細かな決まりはなく、どこの井戸から汲みだしてもよいことになっていた。水源から半分に割ったモウソウチクをつないだ樋で井戸まで水を引いていた。井戸からバケツで水を甕や水桶にくみ出した。頭にワヤマルザをあてたり、手ぬぐいを丸めたものをあてて、水桶を自宅まで頭上運搬した。水汲みは通常朝夕2回行われた。井戸は中腰で作業ができるような高さに作られていた。島に水道が引かれると、下町の下に花田用の新たな井戸を作った。井戸には水源から樋で水を

流すようにしてあった。樋の管理には、12月にトヨブシン（樋普請）と呼ばれたモウソウチクを利用した樋の交換作業が行われた。樋が竹からトタンに変わるとトヨブシンは井戸の周りの清掃作業のようなものになった。また、役場の先の川沿いにヒヤミズイケと呼ばれた水源があった。御蔵島ではもらい湯の習慣があり、親戚などで風呂を沸かすともらい湯に出かけた。また、風呂をたてると最初に年寄りを入れるようにした。西川の家には皆がもらい湯にいったという。

(5) 共同体的なるものの変化

このような歴史的・文化的素地を有する御蔵島では、競うことを意識的に避ける傾向がみられ商売などでの競争は共倒れになることが常に危惧されており、かつては新たな生産活動への模索に対しても慎重であった。御蔵島での日常的な生活における規範は助け合うことであり、とくに日々の消費生活である衣食住においては、女性たちの互助的な活動がみられた。これらの背景には、江戸時代から昭和10年代まで続いていた扶持米制度によって培われてきた共同生活に対する意識がその後も共有されてきたことがあげられる。御蔵島は「助け合いの島・お互い様の島」で、御蔵の暮らしは分け合うことが基本だった。御蔵島の人たちは自分だけいいことができない性質で、珍しいものが手にはいると、島中に配らなければとするような気風があった。また、御蔵島では競うことを避けようとする一方で、情報については敏感で

1 軒が新しいものを購入すると、すぐに全戸が同じものを購入するよ
うな傾向があった。御蔵島は今なお老人が一人でも生きていける島で
ある。みんなが声をかけてくれるし、生活にお金がかからない。歩け

る人たちはたいてい畑仕事に出かけている。しかし、こうした慣行にも次第に変化が生じてきている。

戦後に青年団活動が盛んになった時期があり、文化部と産業部とに分けてさまざまな活動が行われた。当時は60名ほどの団員がおり、先祖祭りの運営などに従事した。文化部では年に1回、団員による村芝居を上演した。産業部は山林の開墾などを行った。

当時、島に暮らす青年たちの大きな役割は舳作業で、島の沖合いに停泊した船まで直径32mmの麻綱を泳いで曳いていくことが若者たちの仕事であった。船と棧橋とをロープで結び、そのロープ伝いに舳を移動させた。昭和30年代に入るとウェットスーツが導入され、ロープも麻から浮力のつよいハイデックスに代わったため、作業は幾分軽減されたが、若者たちへの負担は大きく、若者たちが島を出る遠因になった。そして、島のなかの気風が変わったのは射爆場建設計画をめぐって島内が紛糾した昭和39年頃からはないかといわれている。この頃はまた島を離れる若者の数も多くなった。その後の島の付き合いは、男性を中心にしたものへと推移している。

前章で詳述したように、かつて御蔵島ではお金を使う機会があまりなく、交際的手段としてお金のやり取りはしていなかった。何でもお金で済ませるようになったのは戦後からで、それまではお金の使いみちもなかった。島の中でお金を持つこと自体がなかった。昭和30年代頃から現金に頼る生活に変わってきた。現在は何でも買える時代になって、島の暮らしは楽になったが周囲を思いやる気持ちが希薄になってきたように感じられるという。

また、昭和30～40年代にかけては、サクユリやニオイエビネランの出荷が盛んになり、私有林をはじめ村有林での採取が盛んに行われた。昭和40年代には全国で「離島ブーム」が起こったが、御蔵島ではその当時は島の人口減少が進んでおり、観光客への対応に応じられるような準備は進まなかった。こうした島をめぐる変化などから、40年代後半から公務員や建設会社の社員などとして帰島する者が増加するようになった。これにともない、昭和50年代には観光業を前提として帰島する者も現れ、自営で民宿経営やイルカウォッチングなどに従事するようになった。近年では、島内でも「イルカで一年分を稼ぐ」といわれるようになった。観光のために島に1日に120人もの観光客が訪れるようになって、島の人たちの気持ちが変わってきたという。島にいて儲かるのなら観光にかかわる仕事をしようとする人が増えてきたのではないかという。

4. 御蔵島の生活文化の変容

(1) なりわいの変化と離島生活の変化

御蔵島が三宅島から独立した当時の人口はほぼ100名であったという。独立後に人口が260名まで増加したため、島で食糧を自給しながら安定した状態で生活できる人口について危惧されるようになった。御蔵島には伝統的な家を単位とした28軒衆という集団があり、かつてはこれらの家では長男しか結婚できないとすることで、家数と人口の制限が厳格に守られていた。百姓株を28軒以上に増やさないようにすることもこうした過程で決していくことになった。島内居住者のうち、

「栗本」「広瀬」「徳山」「西川」「井上」「小林」姓の家は旧住民の家筋で、小林姓は三宅島出身の姓であるが、広瀬の縁者が小林姓を名乗っているのだという。他の姓は、御蔵島でクニ、ホンド、ナイチと呼ぶ日本列島各地から移り住んできた新住民ということになる。年配の人たちは内地をクニと呼ぶことが多いという。

大正時代から昭和時代初期に、島根県隠岐島から木炭製造や林業に従事するために入植した人びとがいた。これらの人びとは太平洋戦争前に島を離れた人が多く、伊東経由で内地に戻ったらしいという。

昭和40年代の全国的な離島ブームの頃は、御蔵島の人口は減少していた。射爆場問題で島内の人間関係の調和が乱れた時期であったことなどが事由として考えられる。その後、島内での建設工事や電気工事が盛んになると歩調を合わせるように、内地からの帰島者が増え始めた。NTTや役場・学校・保育園などの職場には、内地からの就職希望者が増えていくことになった。この頃から、御蔵島は現金収入を得られる職場がある島に変化していった。

昭和50年代には島での自営生活を目指して帰島してくる人たちがみられるようになり、やがてこれらの人たちが民宿経営やイルカウォッチングに従事していくことになった。

山の利用では近世から続いてきたツゲの生産に加えて炭焼きやハチジョウグワの出荷、サクユリやニオイエビネランの出荷、次いで島内でのツゲ加工が行われ、農では養蚕、豚や牛の飼育が、海の利用ではムロアジの節作り、そして現在も盛んなイルカウォッチングへとそれぞれ推移してきた。この間も「嫁に行くなら八丈島、婿に行くなら御

蔵島』といわれたくらい、御蔵島では女たちがよく働いた。男たちの仕事は山仕事が主体で、集落内での作業のためこうした評価がうまれたものと考えられるが、実際に島の女たちはよく働いた。昭和40年代の離島ブームの頃は御蔵島には民宿が1軒しかなかったため、全国的な離島ブームが御蔵島の観光資源開発に直接は結びつかなかったが、現在ではイルカウォッチングに押し寄せる観光客を対象とした民宿業が賑わっている。便所が汲み取り式から水洗式に変わったのも25年ほど前からである。そして多くの観光客が訪れるようになったが、一方で後継者が不在のままの家も多い。

イルカウォッチング 御蔵島周辺には沼津船籍などの遊漁船が来遊しているが、御蔵島船籍の遊漁船はない。御蔵島のイルカウォッチングは平成3年から始まった。三宅島の船が始めたのを真似て始めたのだという。イルカ船の建造は、本体そのものは100万円ほどで内・外装の装備を加えていくと150万円くらいでできる。これにエンジン代を加えると、おおよそ500万円くらいになる。

観光協会に登録した15軒の業者によって実施されている。平成16年度までは午前6時から午後6時頃までの間に5回もイルカウォッチングの船を出すようなことがあったが、平成17年度からイルカの保護と海上での事故防止を意図して、1回の出港時間を3時間までとし、さらに1日の出港回数を3回までに制限し、出港回数を示す旗を船ごとに掲げるようになった。1回目は緑色、2回目は黄色、3回目は赤色
一一九

また、定期的に観光協会の監視船が島の周囲を巡回し、乗員数が届

出どおりであるかなどを確認することも始めた。もともと漁師ではない人たちがイルカウォッチングの担い手になっており、海洋についての経験や知識が十分でないことも自覚されており、こうした取り決めに対してはすばやく対応しているが、一方で「イルカが遊んでくれる」ことを期待している客たちの多様な要望を満たそうとすると、さまざまな無理が生じることが危惧されている。とくに、特定の海域での競合に対する調整については十分な議論はされていない。

なお、1日に2回出港すると1日10万円ほどの稼ぎになるというが、イルカに頻繁にストレスを与えることで、イルカが御蔵島から離れてしまうことも危惧されており、観光業として永続的に続けていくためには一層慎重な対応が必要だといわれている。

平成16年度から東京都とエコツーリズムの協定を結んだが、そのことにより、通年対応可能な慣行資源開発を模索しなければならないことになった。冬季の交通の制約があることで、巧まざる保護が実現しているともいえる御蔵島の自然環境を、新たな観光資源として再構築



写真7 イルカウォッチングにむかう観光客

していく作業は、御蔵島にとっては矛盾する無為なことにもなりかねないとして、島内におけるエコツーリズムに対するコンセンサス作りを進めると同時に、観光協会が窓口になって今後の東京都と協議を進めていくことになるという。安定した観光業を維持するためには、島の人びとがこれまでの自然とのかかわりのなかで残してきた自然環境に対する自覚と評価を共有することで、現在の状況をどのように利用し続けるのか、継承していくのかについて自戒していく機会が必要ではないかと考えられている。

かつて離島を旅した文人墨客は、内地と異なる自然環境や生活文化を求めて離島を訪れた。離島の自然環境は内地とは異なる厳しい自然環境のなかで形成されたものが多く、鑑賞の対象ともなる多様な自然環境が存在していた。生活文化についても、離島が隔絶した存在であった当時には、島ならではの独自の風俗や習慣が伝承されており、島の歴史的文化財とともに観光資源としても十分な価値を有していた。ところが、戦後の離島ブームはマスコミを介した比較的均質的な観光需要を背景としたものであったために、各島が有していた自然的・人文的観光資源に対する離島生活者内部からの評価というものが加えられることなく、観光客の需要に対する観光要素を加味したものが離島の観光業として定着していくことになった。換言すれば、日本の離島観光は、自然環境を観光資源としながらも、それに海洋レジャーなどが通年にわたって楽しめるという新たな要素が加えられていくことになったのである。今後の離島観光の課題は、島が本来有していたそれぞれの「離島らしさ」を島民自身によって観光資源として自覚し評価して

いくことができるかであろう。

しかし、島内での世代交代がすすむ過程で島民が現在の状況のなかで、かつての「離島らしさ」を認識できるような機会も失われつつあることにも留意しなければならない。観光に特化しつつあるようにみえる島においても、島民一人ひとりの観光や海との関わり方はさまざまであるし、それらに対する視座も多様であり重層的である。

御蔵島のエコツーリズムは大方の観光客の支持を得て、多くのリピーターを生み出しているようである。しかし御蔵島に限らず、物言わぬ野生生物を観光資源とする場合には、人間の側の身勝手な思い上がりは、野生生物に対して知らず知らずのうちに甚大な影響を与えているのかもしれないということにも、一層留意しなければならない。その結果は、突如として明瞭な形で顕在化してくることになるからである。

自然環境を保護しながら観光資源として活用していくエコツーリズムの思想は、周囲を海洋によって隔絶された離島にとって地域社会の活性化への波及効果も期待できることから、離島にとってもっとも有効な手法であろう。そして、その実現のためには観光に直接関わらない人びとを含めて、島で生きようとする人びと全てが関わる形での、観光に対する取り組みに向けての議論が必要である。

島内外の交通 かつて南郷に集落が形成されていた頃には、里から南郷までは徒歩で通った。コウジミカンの収穫時期にも出かけていった。朝の3時頃に提灯の灯りを頼りにして山道を越えていった。南郷に着くとちょうど朝ごはんの時間だった。南郷への土産には、お酒やうどんなどが喜ばれた。お酒は四合瓶に入れて運んでいった。島内で

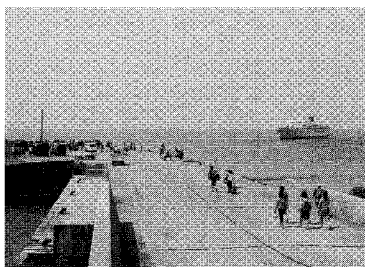


写真8 島を去る観光客たち

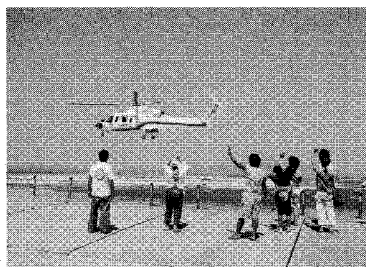


写真9 ヘリコプターを見送る島民

初めて自動車が走ったのは、昭和31年で発電所工事の際にオート三輪車が走った。昭和36年に都道工事が着手され、それ以後島内の交通は自動車の利用を前提としたものになっていった。都道の拡幅工事とともに路上の石仏をはじめ墓所の一部も改葬されることになった。それまでの島内の主要な道路は、浜と里を結ぶハマノミチ、里から島の東側を経て南郷にいたるオオミチ、里から島の西側を経て奥の院にいたる道であったが、それらがトドウ（都道）と総称されるようになった。里集落の各家を結ぶ道は今もムラノミチと呼ばれている。ツゲの搬出やカツオドリの捕獲のために、ウト（杭）を用いてヨコオタミチやウトミチとして階段状に整備したヤマノミチは、現在は利用する人間に限られており、その存在が忘れられつつある。ハマノミチとムラノミチに埋め込まれた玉石も大方が舗装工事の際にすっかり埋没してしまい、ムラノミチの一部にその名残が見られる。

- 一五 明治24年（1863）に東京湾汽船（現東海汽船）が伊豆諸島に航路を設けた主要な目的は、御蔵島からのツゲを運搬するためだったという。昭和38年（1963）には三宅島・御蔵島間の連絡船として「みやま丸」

が就航し、その後「えびね丸」に引き継がれていったが、三宅島の噴火による全島避難を機に両島間の連絡船は途絶えた。当時は御蔵から東京まで12時間かかった。三宅島には船待ちのための宿があった。こうした内地との交通出段の不便さが、やがて御蔵島におけるイルカウォッチングなどの島としての独自性を強調していくための背景ともなった。昭和59年には貨物船「弥栄丸」が就航した。この間に栈橋の延長工事が進展し、平成3年には大型客船「ストレッチャ丸」が就航し、観光客数も増加していった。

それでも西風が卓越する季節には、船便は決行しがちであったため、島民の安定した生活を確保するために平成五年からヘリコプター航路も開設された。ヘリコプター航路の開設により、冬季に内地等から完全孤立してしまうことはほとんどなくなった。御蔵島は七島の中で1番早く医者を常駐させたといわれている。現在の御蔵荘あたりに当時の病院があった。現在は常駐の医師に加えて、月に一度健診団が島に来ることになっている。かつてスペイン風邪が流行り多くの死者が出



写真10 荷物船が着いた日の店先

た時などは、ミサシウラから船で三宅島に運んだ。現在は急病人は緊急ヘリで内地に急送される。当初は千葉県鴨川市の亀田病院に搬送されたが、現在は都立広尾病院に運ばれる。

毎週木曜日に三宅島からの貨物船が入港する。三宅島の噴火以降、貨物船の航路は大島経由の便に変更されたりされている。荷揚げ当日は早朝から荷物の仕分け作業や店頭での食料品の販売が行われる。とくに2軒の商店の軒先ではそれぞれの店にゆかりのある主婦たちが商品の陳列などを手伝いに集まるため、とりわけ賑わう。生鮮食品の購入については、一週間分の買いだめをすることになるので、店先では昼近くまで島中の主婦たちの買い物が続く。この日は食堂も休みとなる。

一方の店はツケで購入できるが、後発の店は現金払いのみである。客層の差異は、近隣の家が客となっていることに加えて、それぞれの店の親戚となる家が主要な客となっているようである。また、両方の店をまわる客もいる。

(2) 多層化する御蔵島村

御蔵島では離島振興法施行後の昭和32年に水力発電所が完成し昼夜発電が可能になり、次いで簡易水道の敷設、電話の開通、さらに、港から仲町間の都道工事の竣工、栈橋の延長工事などが順次実施され、生活基盤の整備が急速にすすんだ。昭和53年には川田水源からの水道工事が完成し、内燃力発電所も稼動した。これらの生活基盤整備事業の進展により、女性の運搬作業に依存していた島内の生活が大きく変化していった。特徴的なことは、祝いの寄り合いを自宅でやらなくなっ

たことで、ホテル（御蔵荘）で賄ってもらえることが多くなった。準備等の世話はなくなったが、付き合いが希薄になってきたようにも感じるといふ。

食糧の自給手段が限られていた島では、「百人超えたら油断するな」と人口増加を互いに戒めるという自衛手段を講じることで、この時代の暮らしを維持したのだといわれている。具体的には長男以外の結婚分家を許さないという、苦渋に満ちた人口抑制策をとることになり、この慣例は長く継承されていくことになった。昭和30年頃までは島内婚ばかりだった。近隣の人たちの口利きでまとまるが多かった。それでも、島内の男女の数は限られているので、縁談をまとめるのは大変だった。家どうしでは、家格についてやかましく言うことは少なかったが、相手となる家の財産などを考慮して親が相手を決めていた。

嫁入りの支度として嫁が婚家に持参したのは、米1俵と山の道具などの仕事道具のみであった。嫁にとって辛かった仕事は、畑づくりの作業とツゲの運搬だった。この頃は、御蔵島に嫁いできて逃げたい嫁がいなくなった。給料で生活していくことができるようになったので、百姓も山仕事もしなくていいようになったという。

かつて島内に加えて三宅島の坪田などから嫁いでくることもあったが、現在では内地から嫁いで来た嫁が半分以上を占めるようになり、昔からの御蔵島の慣行がわからなくなっているといわれる。村の産業センターなど現在は安定した現金収入源があるため、子育てのため一
二
に島に移り住んでくる人たちもいるという。かつては三宅島から嫁が来るだけでも「血が新しくなった」と言われ、島外者との通婚は島

に新しい血が入ると歓迎されたが、一方で近年のような島外出身者との通婚の割合が多くなると、次世代の子どもたちは島の伝統を知らない子どもたちの意で、周囲から「ハーフの子」といわれるようなこともあったという。

島外から移り住んだ人たちは村営住宅に住むことになる。家族連れの教員や役場職員などが住む家屋として、約20年前に建てられた。島内では土地は先祖様からの預かりものという意識が強く、とくに宅地を手離すことは皆無で、宅地空間の制限があるために、一戸建ての住宅を持つことはできない。新たな住民は村の付き合いから隔離されているような気持ちになることもあれば、住宅での生活は住宅施設内で完結しているので気ままにいいと感じるときもあった。村営住宅に住む人たちどうし、次いで旧村の人たちとのあいだのプライバシーが気にならなくなると、お互いのことが自然にわかるようになって住みやすくなったという。しかし、各集団間の横のつながりは密になっても、各層を貫くつながりは希薄化していく傾向が生まれていった。井戸からの水汲みがあった頃は、そこでの女性たちの雑談が世代を超えた一番の情報源となった。そのために、噂話で村中に情報が広まってしまうため、なんでもはっきり話すのがよいとされ、内緒話をしないことにしていたという。

里集落内の掲示板は4ヶ所に設置されており、村役場からの連絡事項は掲示板と島内放送により伝達される。貨物船の入港曜日の変更についてなども掲示されていたが、高齢者のなかにはそれらの掲示を見落としている者もあり、島内放送がそうした見落としを補っている。

御蔵島では伝統的に回覧板による伝達は行われていない。戦時中のみ回覧板がまわったことがあったという。老人たちに対する日常的な連絡や情報は誰かが家を訪ねてくれるし、外を歩いていると誰彼となく声をかけてくれるというが、島外から家族で移り住んできた層との関係はこの段階まではいたらないのが現状である。

また、島外に出た者は竹芝棧橋に近い浜松町の近くに住むという傾向があったが、近年では千葉県や埼玉県に多く住むようになったという。島外においては島出身者の分散化の傾向が強くなっていった。

(3) 先祖祭

現在島内の各家で行われている行事は、家族構成や家族の来歴により同じ行事であっても、その捉え方や行事として行われる内容に差異がみられる。代表的な事例として、春と秋の先祖祭を取り上げる。

春分の日を中心に墓所の清掃や墓参り、レイシャ（祖霊社）での先祖祭りが行われる。18日には墓所のツツアライをし、水のみを替え、19日には墓所の掃除を行い新しいサカキと生花を供えた。サカキにはマサカ（マサカキ）とウスサカとがある。

20日の朝に白餅や蓬餅を搗いて丸餅の三つ重ねのお供えを作り、午後には水とお茶を持って墓所にホトケサマを迎えに行く。各家ではお膳にあらゆるものを供えた。墓所では「誰々は肩に乗れ、誰々は手につかまれ」などと唱えた。20日の夜はヨミヤといい、墓所の霊を呼びおこし、祖霊社に迎え入れるともいうが、祖霊社で先祖祭りをを行う前に墓に送るともいう。20日の墓参りは女性のみが行うとされている。

祖霊社には28軒衆の先祖を祀る棚が設けられており、21日には村人

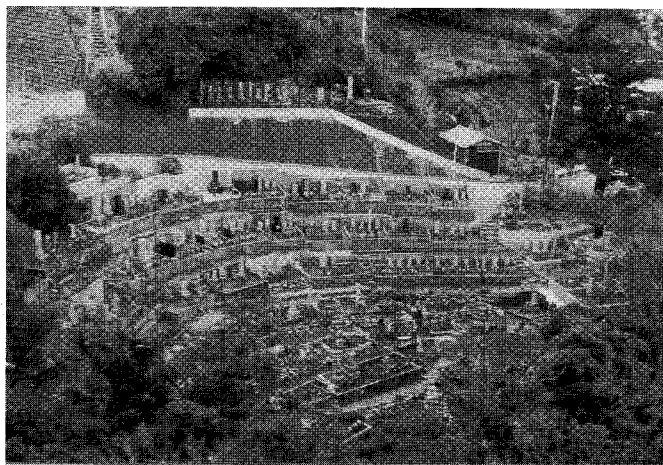


写真11 墓所（ハカシヨ）

が祖霊社に集まって先祖を祭った。供物は島内でとれた農作物を供えるのが習いで、里芋の煮付けに大根やアシタバを供えることが多かったが、次第に島外からもたらされた果物などを供えるようになった。かつてはそれぞれの棚に各家自慢の供物を供えたという。墓所には真新しい生花が供えられたが、それらも島外から購入したものに代わっていった。現在は氏子総代と村長をはじめとした村の要職者と神歌を歌う寡婦となった女性たちが拜殿に参列する。神歌として詠じられているのは御詠歌のようである。家族揃って墓参りをする家もある。

また、オンナノマツリとって教えて15歳の女性の祝いが行われ、和装した娘たちが参列することになっていたが、現在は中学生・高校生の子が晴れ着を着て参列するという事になっているが、島で生まれた娘に限るともいわれており、参列する娘の数は少なくなっている。

る。神主が祝詞をあげ、参列者全員が神歌を七回詠唱する。女性たちは柏木も叩く。儀式が終わると、紅白の餅撒きが行われる。かつては神楽や若衆の奉納相撲も行われていたという。昔は何の娯楽もなかったから、先祖祭りが楽しみだったという。

春の先祖祭りと同様に、秋分の日に行う祖霊社での先祖祭りを中心とした祭祀が行われる。20日から墓所の草取りや墓掃除を始める。先にたってやる高齢者たちの様子を勘案して、順次世代ごとに墓所に出かける。この日はツツアライまでを作業の目安とする。御蔵島では墓にサカキは欠かせないものとされているが、ツツアライから翌日まで欠くことになる。

21日は墓所に生花とオサカキを供える。島では花を供えることを競い合うところがあり、この時期には「どこの花がきれいだった」ということが女たちの間では常に話題になった。かつては秋の先祖祭りでは赤いケイトウ、春はスイセンというのが定番で、その時期に花が咲くように、種を蒔いたり風除けなどをして準備をしたが、現在では郵パックで内地から生花を取り寄せることが多くなり、船の欠航が気になりになるようになった。

22日はヨミヤと呼ばれ、早朝から餅を搗き、さらに海や畑でとれたものをお供物として供える。先祖祭りに供える餅はシロモチ・ヨモギモチ・サツマモチで正月の餅の組み合わせと同様である。丸餅を三つ重ねにして供える。御蔵島における儀礼食には里芋が不可欠で、先祖祭りでも里芋の煮付けが供えられる。加えて、南瓜やサツマイモが供物として供えられる。野菜の供物は春と秋とで少し異なる。供物の準

備が終わると、9時を目安に墓所にホトケサマと呼ぶ先祖の霊を迎えに行く。オムカエとか「連れに行く」という。先祖の霊は背中に背負って帰るともいい、気合で連れて行くという。午後に迎えに行く家もある。墓には「参る」のではなく、「祭る」のだという意識が見られ、迎えにいった老人たちが子どもたちに「マツレ」と声をかけている様子がみられる。

23日はホンマツリと呼ばれ、祖先の霊を送る。各家では砂糖をたくさん使って丁寧にこしらえた餡のおはぎが作られる。祖霊に対するお土産であると同時に、祖霊とともに親族が共食するものとして、親戚どうしで配りあう。

祖霊を送る場所については、祖霊社に送ると解するものもあれば、墓に送ると解する者もある。一般には午前10時の太鼓により各家に戻った祖霊たちが祖霊社に呼び集められ、すべての祖霊たちに対して神送りの儀礼が行われると解されている。後者のような墓に送るのが本来のやり方と解するのは、仏式の盆行事の名残と考えられる。かつては祖霊社に着物で盛装した娘たちが集まり、最後に餅まきが行われた。

島では墓に関するものを触るのは、春と秋の先祖祭りの期間だけという決まりがあり、墓の改装などもこの期間に行われた。かつては稼ぐのに忙しくて、現在ほど墓所には通わなかったという。

先祖祭の準備などをとおして女性たちの間で意識されているのは、内地から嫁いできた女性を含めて、年長の女性たちが作業をやり終えたことを確認しながら、順次作業を行うということである。作法などは承知していても、年長者の作業が終わった頃合いをみて作業を行う

ということが堅持されている。

(4) ガイジン・ハーフと呼び合える社会

先述した「ハーフの子」という呼称は今から20年ほど前に使われたものである。当時の当事者や家族にとっては、今もって忌まわしい呼称であることは想像に難くない。それを承知でここではこの呼称が内包してきた島民の意識について考えてみたい。

具体的には、この言葉が島の中で死語になっていないことの意義を考えてみたい。互いの呼称を「〇〇アニ」「〇〇ネエ」と呼び合う島内において、この言葉を最初に聞いたときの印象は当事者を何か非難するような言葉としての印象が強かった。ところが、少なくとも現在においては非難の言葉としてよりも、ある種の人格を評価したものとして用いられている。その契機となったのは、早朝のゴミ出しを待つ間に主婦たちの間で交わされる会話の中で、「ガイジン」という言葉がごく普通に交わされるの聞いたことであつた。それらは自分はジノモノではないからという遠慮の意味合いだけではなく、島内における当事者の立ち位地を互いが認め合うという意味合いが強く感じられる。

つまり「郷に入れば郷に従え」と強要もしないし、当事者も無理にわかったふりをしませんという意思表示として、「あんたはガイジンだから」、「私はガイジンだから」と呼び合っているのである。互いに異なる背景を持つ者どうしであることを自覚したうえで、互いに必要な存在であるという自戒が共有されているからこそ、互いをこのように呼び合えるのである。そして「ハーフ」もまた同様なのである。両者の間には互いが背景としているものを認めあいながら互いを評価す

る関係が構築されているということなのである。

多様化するなりわいのもとで多層化する社会において、人びとが共同体的なるつながりを形成していく前提がこうした他者をそれぞれ異なる人格としての互いに存在を認め合うことなのではないだろうか。そのように御蔵島における直近の2世代の関係を捉え直すと、先祖祭におけるジノモノに対するガイジン世代の立ち振る舞いの意味が理解できるのである。

5. 御蔵島における共同体の再構築

前章では島で生まれ育った老年世代と直近の世代との関係についてみてきたが、御蔵島にとって今後の課題となるのは、内地から家族で移り住んできた世代と他の世代とのつながりであろう。御蔵島の世代構成は、夫婦ともに島の出身者、配偶者は島外出身者、夫婦ともに島外出身者という3世代によって構成されている。前者の2つの世代の後継者たちは島外で就職し家庭を持っている場合が多く、定年を迎えたら墓守のために、島に戻ろうと考えといる人たちが多いという。それらの後継者世代の年代層は、島にとっては中枢を担う世代であるため、その代替世代の人びとを補充しなければ、島内のさまざまな活動に支障をきたすため、積極的に島外からの居住者を受け入れていくことになった。そして島外からの居住者の子どもたちの割合が増えていくことになり、その子どもたちも高校進学の間で島を離れることになると、島に新たに移り住んだ人びとはそこで島に住み続けるかどうかという判断をしていくことになる。こうした葛藤状況の中で島の日



写真12 新・旧島民のゴミ出し

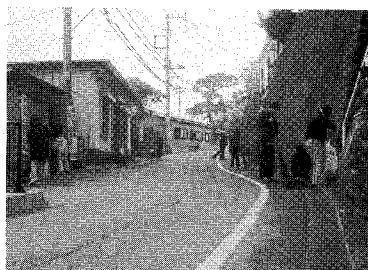


写真13 小学生たちの奉仕作業

常生活は推移している。

(1) 島の子供たちと教育

現在の御蔵島が直面している課題は、島の後継者となる子どもたちの育成である。『御蔵島島史』第2章に「御蔵島共同体」の項目があり、中学生以上からのアンケート結果として、御蔵島の人たちにとって一番大切なものは「家族」であったことが紹介されている。そして、こうした意識を生みだした事由として、御蔵島では中学校を卒業することが、即島を離れることを意味し、親から離れねばならなかったことが述べられている⁽⁴⁾。御蔵島においては子供たちの教育が積年の課題なのである。

そしてこの課題の解決はこれまで以上に容易ではない。現在御蔵島で生活している子どもたちの約8割は島外から移り住んできた家族たちの子どもたちだからである。ということは、この子どもたちは一定年数を島で過ごす親たちの転勤等により島を出てしまう子どもたちであるかも知れないのである。

また、島で生活していったとしても、島内で受けられる教育は中学

校までであるから、高校進学段階で島を出て、その後の進路によっては島には戻ってこないという可能性もあるのである。かつての島の学校教育は、「島だから」ということを意識するあまり、島で生まれて育ったことをコンプレックスとして植えつけてしまうような側面があったという。島の良さを自覚することよりも、島で暮らすことの不利を自覚することになったという。そのために現在まで島内での教育の目標は御蔵島で生まれ育ったことを誇りに思える子どもたちを育てるということになってきている。

ところが、生粋の御蔵っ子もいなくなってしまい、御蔵の言葉を使う子どももいなくなってしまった現状では、いずれ内地に戻るであろう子どもたちを対象に教育活動を行うという状況が生じてしまうのである。小学校に通う子どもたちの8割を島外出身者の子どもたちが占めるようになった。「ガイジン」・「ハーフ」と呼び合えるようになった世代とは子どもの付き合いを介して、自然に大人たちの付き合いが広がっていくようなこともあったが、その次世代とジノモノとの関係はその接点自体が見い出せない場合がある。

こうした状況下でも多くの島民は子弟が在学していなくても学校行事に積極的に参加しているが、こうした矛盾を内包した現実を島民全体が自覚しないわけにはいかない現状である。

戦後になって、心身の鍛錬のために子どもたちに剣道や柔道を教えるようになった。指導してきたのは、駐在所に勤務する警察官で、御蔵島に赴任するときの島側の条件にしてきたのだというが、現在ほどもちも行われなくなっている。

(2) 島で暮らし続ける意思

島外出身者はジノモノに対してどうしても遠慮がちで、島外出身者は決まった席がないような不安定な立場を意識することがあるという。こうした意識の背景にあるのは、島で暮らし続けようとしても結局自分の宅地をもてないという制約があるからのようである。島では28軒衆とそれらから派生した親族により里集落の宅地は埋め尽くされており、新たな住民は全て村が提供する集合住宅に住まなければならない。子どもの成長に合わせて新たな住宅を得たいと思っても、社宅住まいのような生活を続けなければならないのである。

一方で平成10年頃からイルカウォッチングを始めるために、島外で就職していた長男層が帰島するようになった。かつては里の集落の中に新たな家屋を造ることはできなかったが、実家の屋敷内を分割したり、屋敷に連なる畑などを利用して民宿用の建物を建てて営業を行うことも始まった。また、この頃から民宿の改装などが行われるようになって、観光客の受け入れ態勢が整備された。例年7月以降は連日100名を超える観光客が訪れるようになっていった。

御蔵島は在住者間での世代を貫く関係の再構築という課題と、島外から観光目的のために断続的に島にやってくる観光客との間の関係の再構築という課題に直面することになった。

御蔵島に限らず現代社会で生活するということは、自分という存在が他者との関係によって成り立っているということを実感できなくても生きていくことが可能である。既して日本人の価値観は多層的で、
一〇二
現実に生活している社会においては共同体の一員として非個人主義的

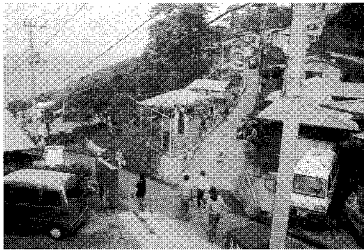


写真14 島民と観光客



写真15 御蔵島の子どもたち

な精神を受け入れ、現実を超えた関係の中では一人で生きる個人主義的な自由な精神を受け入れている。言い換えれば、意識のある層では合理的な考え方や論理的な方法を受け入れながら、一方では別の意識の層で非合理的なものや非論理的なものを重層的に受け入れることで私たちの生活は成り立っているのである。そのように私たちの日常的生活を捉えなおしてみると、共同体として形成されていた集団が必ずしもある共通した意識を共有していたとは限らないということにもなり、現代社会においても非人格的なものの存在を含めて他者との関わりなしに生きていくことのできない人間は、段階的に自在に他者とつながっていく手段を構築していくことになるはずである。

御蔵島においても、島で暮らし続けるのであれば、島という環境なかで暮らししてきた人びとの過去の経験を受け継いで生きていくことが必要である。何を受け継いで生きていくのかといえは、自分自身が行動することによって責任を負える範囲や関係を知ることであろう。

都市生活のなかではこうした社会的なつながりは意識しにくいが、

島という社会は今なお、そこで暮らす人びとが責任を担う小さな社会の連合体として存在しているということを自覚していくことが必要である。

そして、こうした自覚が自身が閉じられた社会に暮らす存在ではなく、さらに大きい社会を構成する存在であることを教えてくれるはずである。

(3) 共同体なるものの再構築

誰にとっても自分が生きている社会は絶対的なものであると考えがちである。それは自分が経験したことを基準にすることが最も「正しい」と思えるからであろう。しかし、一方で、それぞれが属してきた地域や時代の中で培われた価値観は多様であり、多元的に発現してることが多い。共同体について考えるときに、私たちは当該集団を一元的に統合している論理がそこには存在しているのではないかと捉えがちであるが、このように考えようとするのが既に錯覚を生み出しているのかもしれないのである。この錯覚が個人間や集団間での傲慢さを生み出し、さらにそれらを他者にも押し付けようとすることになる。

人間は元来から矛盾を内包した存在でもある。そのような集団が歴史的に維持管理してきたと考えてきた共同体なるものも、翻ってみればそれぞれが矛盾を抱えた個人の集合によって成り立ってきたわけである。

御蔵島の例で考えてみると、週に一度貨物船が島に着く日は、ほぼ全島民が2軒の商店がある里集落の中心に集まってくる。就学前の子

どもたちから高齢者まで集まってくるし、島外からの観光客も集まってくる。島に住み続けてきた人間でも新たに住むことになった人間でも、人間の見聞や経験は思いのほか限られたものでしかないと自覚しあうことができれば、生き方を異にしてきた見ず知らずの人のびとが集うことによって行われる共同作業のなかから、新たな共同体的なるものが創出されていくのではないだろうか。むしろ、矛盾を抱えた他者が集まるからこそ共同体的なる関係がその都度再構築されていくのではないかと考える。

おわりに

御蔵島の伝統的な生活文化を対象に、断絶したり、衰退したり、あるいは変容しながら今日まで継承されている事象や新たに創出されてきた事象について述べてきた。こうした推移の結果として現在の御蔵島の生活が形成されているということを念頭に置けば、御蔵島に比べて一層錯綜しているように思いがちな私たちが属している現代社会においても現在にいたるまでの変容の結節点がどのような要因を契機として発生し、それらに対して先人たちがどのような評価や判断を行い、その結果として現在に至る生活文化の核となるものが受容されてきたのかということも確認することができよう。

日本民俗学はその出自の時点から「常民」などの概念を用いて画一的な日本人像を模索しようとしてきたことは否めないであろう。

社会という器自体が大きく変容しつつある現代社会は、地域社会の成り立ちや移り変わりを実態的に捉える好機でもある。そして、現代

社会において「共同体的なるもの」を問い続けることは、日本人像を多角的に捉え直すことにもつながるはずである。

小稿で記述した内容は『御蔵島島史』に関わる調査の過程で得た資料を骨子としている。調査の機会を与えていただいた御蔵島村教育委員会および調査でお世話になった御蔵島の方々に御礼を申しあげる。

付記

小稿は平成17・18年度成城大学特別研究「地域文化の継承と再創造に関する研究」（研究代表者・小島孝夫）の成果の一部である。

参考文献

- ジェラード・デランティ『コミュニティ・グローバル化と社会理論の変容―』NTT出版、2006年
東京都御蔵島村編・発行『御蔵島島史』2006年
東京都御蔵島村編・発行『みくらの森は生きている―巨樹王国、御蔵島からのメッセージ』2006年

注

- (1) そのための具体的な手法として、デランティが試みたような「コミュニティ」を自在な視点で捉え直すことが有効である。
- (2) 次三男の分家妻帯を勧めるために、明治29～30年にかけて里村から南郷への移住が行われたことがある。明治37年には7戸、30名程が住んだというが、昭和41年に離村無人となった。
- (3) 家臣等への給付物として米を給付する俸給形態を指すのではない。

御蔵島をはじめとした伊豆諸島では近世期にわたり年貢を貨幣なり特産物で代官所に納める一方で、毎年「扶持方米」という呼称の御救米の支給で受けるという制度があった。

この制度は御蔵島では近代に入っても島の産物の売却代金で生活全般の費用を賄うという独自の仕法として存続され、昭和12年4月10日の村議会で廃止が可決されるまで、御蔵島における日常生活の基礎的な役割を果たした。廃止と存続をめぐる経緯は『御蔵島島史』に詳しい。

(4) 『御蔵島島史』1122～1125頁。